

個性の成長と幼稚園

個性の成長における施設保育の影響について——



日 名 子 太 郎

私の与えられた課題は、「個性の成長と幼稚園」であるが、幼稚園教育ならずとも、保育所の保育においても当然、個性の成長への影響はあり得るとの立場から副題のような解釈において述べたものであることをお断りしておく。

一、現代の社会における個性の軽視

戦後の教育の新しい特徴は、民主主義的ということであり、当然、そこには個性の尊重ということ、自主性の重視ということだが、もっとも根本的な問題とされていた。それにもかかわらず、わが国の戦後の教育では現実には全く個性が軽視されてし

まっており、極めて画一的な教育が行なわれ人間の均一化が招来されているにすぎない。これは、日本の社会が、定型的な人間のみが住み易い状態と化しており、いわゆる、個性の強い、枠からはみだした人物、型やぶりの人間を疎外してしまう傾向に由来しているのである。そして、そこには「ツマラナイ、オモシロクナイ人間」のみが幅をきかず。そしてこの職場の「マシメ人間」が、案外、ワンダーフォーゲルで、極端なシゴキをしたりするような変質者であったりする。しかもこのような現実的な要求は、日和見主義の教師には易々としてうけ入れられ、教育もいきおい、一定の型に人間を育てあげることが目的とするようになる。

幼児教育の分野では、フレーベル以来、伝統的に子どもの個性というものを尊重してきてはいるが、今日のわが国の幼児教育では、教育界全体の風潮におし流されて、決して、その独自性を維持しているとはいえないものがある。人間の均一化傾向は、今日の教育の結果としては当然のことながら、ひいては人間の個性を無視することになりかねない。

保育における、目標、カリキュラム、内容、方法など、そのどれをとりあげてみても、大半の園は、マスコミの影響で、自主性のない、創意を欠いた、二、三の類似の源泉に依存しているといつてよい。例えば北海道でも、九州でも、同じ雑誌の同じ著者の影響をうけた保育をする。現場の保育者は単にあやつり人形にすぎない。このような保育によって一体そこに何が育つというのであろうか。もちろん、個性は、このような状態の下でもそれなりに成長するであろうが、それほど独自のものが成長していくとは思われない。

もっとも、あまり強烈な個性は、本人も周囲をも不幸にするという考え方であるならば問題は全く別である。事実、今日では、あまり強烈な個性の持主は、周囲から疎外され、不幸であるかのごとくに見える。しかし、今日のように画一的な教育の下で育った均一的な人間のどんぐりの背くらべのような状態

で、沈滞したわが国を再び生氣あるものとすることはむずかしい。これは教育の不幸であるといつてよい。したがって、教育の全分野にわたって、個性というものが、今一度、再考されて然るべきだと思ふのだが……。

二、均一的集団行動のしつけと個性の成長

前項のような状況から、保育も、幼保の差、設置者の差などなく、全体として均一的な集団行動を要求するしつけが重視される。この場合、その理由として、現代の時代的要求もあげられるが、それよりも、従来からの盲目的、服従的な態度と一斉的行動により統一性と秩序を愛好する日本人の性格が大きく影響していることも忘れてはならない。さらに担当官庁なども、自分らの考えに従うのが当然といった態度を維持しようとすることにも原因する。この場合には、個人というものは無視されて、あくまで全体が一つの団塊の如く見て取りあつかわれる。このようなしつけの中でも、もちろん個性は、それなりに各人各様の成長をとげるにはちがいないが、それが極めて弱いものであることは否定できない。換言すると、かかるしつけの下で個性は成長したとしても、それは集団行動で盲目的に統一性を

發揮できるようなものでしかないということであり、さらに統一的、均一的集團行動をしつけることで、個性の成長は、必ずしも促進されはしない。本来、均一的集團行動は、個性を無視しているものであるから、これは自明のことともいえる。しかし、均一的集團行動が、幼児期に全く不要であるとは思えない。生活の中のある部分で、集團の全員が、均一的行動がとれるということは多少はあってよいと思う。しかし、その場合でも、個性を尊重し、個性の成長を図ることの方が本命であることを忘れては本末転倒になってしまう。

三、集團的相互關係と個性の成長

施設保育の特徴の一つは、集團保育という点であるが、その集團保育の方法、内容によって、集團の成員である個人の個性の成長に影響力のちがいが生ずることは疑いない。最近は一部に集團主義保育とよばれる保育が行なわれているが、これは、「單なる遊びの段階から、役割遊びが発生し、それが、子どもの集團的相互關係の発達をうながすという立場」からするもので、この結果が、個性の成長に影響を与えると考えてよい。

この集團主義保育においては、「ヴィチャジの研究の示して

いるように、役割アソビが発生し、それが子どもの集團的相互關係の発達をうながすには、教育者の側からの指導が必要なのである。アクセリナの研究によれば、幼い子どもの場合、玩具やいろいろの教具を子どもたちに自由に配分しただけでは、役割あそびは発生せず、玩具をいじくりまわす段階の遊びに止まっていることが多いし、……それだけでは彼らの遊び活動は複雑化しないのである。」⁽¹⁾という説明によれば、この立場では、かなり、保育者の積極的指導が重視されているが、前項の場合とは、同じ指導でも、その理念はまったく異なるといつてよい。この立場では、個性の成長は、集團的相互關係を通じて行なわれるからであり、それは画一的であることを必要としない。

注(1)「アソビ活動と子どもの集團的発達」駒林邦男、ソビエト教育科学、No.15より

四、集團保育と個別保育

前述のような均一的集團行動のしつけとか、集團的相互關係の指導といったことは、深く考えることもなく極めて積極的に今日の保育にとり入れられている。そして、それが研究の浅い、表面だけのものであるだけに個性の成長という点では不安

がある。またその反面個別保育によって、個性の成長に留意することが欠けていると思われることが少なくない。特に、集団への適応が悪い子どもなどでは、個人的な接触や指導から移行的、ないし並行的に集団指導が行なわれることが必要なのであるが、施設の膨張ということがこの点への配慮を少なからず阻害してしまっている。

どの子どもも（もちろん彼らは入園できた運のよい子どもであるが）ほとんどは、いきなり、相当の大集団に放り込まれ、すぐに均一的な集団行動を要求されるのが普通である。従来ならば、その前に予備的段階も見るべき、近隣の子どもとの遊びが存在していたのであるが、今日ではそれも無いことの方が多くい。この場合、入園時の選考で、不幸入園できなかった子どもも多くは、集団不適応の傾向を示す子ども、ないし発達遅滞児であることが多い。集団不適応の傾向を示すということ自体、その子どもの個性の成長に欠くものがあるわけであるし、また逆に入園しても不適応な子どもは、適切な処置をとらぬ限りは、逆にその症状を悪化して、個性の成長を著しく阻害するといっても過言ではない。したがって、施設では、個性の成長を充分に考えるならば、当然、

1、組、施設全体の集団の大きさ

2、保育者の指導力

3 個別保育の導入

などの点について考慮する必要がある。施設の保育は、集団保育であることが、必要条件であり、独自性をも示すものであるが、個別保育が、その中で行なえず、家庭保育にのみ委ねておけばよいという考え方は誤りである。その集団という独自なものの中で、個別保育、ないし個人への働きかけをどのようにとり入れるかが研究されるべきである。これは、乳幼児保育の発達につれて、ますますその重要性を増すものであると考えられる。

いずれにしても、保育ということの目的は、具体的にはさまざまあるにしても、究極においては、一人一人の子どもを、将来よき市民、国民として育成するためにそれぞれの個性の成長を図ることでなければならないが、そのような配慮が無視されている最近の保育については、よほど考えなければならぬと思う。

五、保育内容に関する規定について

現在、幼稚園、保育所とも、幼稚園教育要領、保育所保育指

針といった法的規制がある。例を大学にとって考えて見ても、

大学という名称が冠せられると、それがどんな種類のものであろうと、一つの枠で単位その他が規制されてしまうが、それが、そこに育つ学生の折角の個性の成長を阻害していることを忘れてはならない。よき常識人、円満な人格者ばかりでは、文化も発達もないし、国家も栄えることはない。個性の成長を図るには、個人の自由度が高く、なるべく拘束の少ないことが必要である。このことはもちろん、幼児期から、絵が好きだから絵ばかり描かせておけばよいということと同一ではない。その子どもが、すべてのことを経験してみても、その上で、絵に集中しているのと、絵の世界しか知らないで、そればかりしているというのでは自ずと違うのである。右を見、左を見、右往左往することはかりして、自己を見失っている人間の多いことを見るにつけ、幼児期では、じっくりと一つのこと長時間集中できるような保育を大切にしたいものである。それには、保育内容など、教育要領の如く細分としたものに神経質にこだわっていたのでは、結局、右往左往型の個性のない人間が出来上ってしまう。教育要領のどこに個性の成長への配慮があるのであろうか。

六、評価と個性の成長

子どもの個性の成長を図るには、どうしても、個々の子どもについて、かなり適確に知っておくことが必要である。どんな点がよく発達しており、逆にどんな点が遅れているかといったことを知っておくことは極めて大切である。

その意味で、評価は、個々の子どもの個性を指導していく上で重要な役割を演じるものである。特に人格面についての評価は、個性の成長を見る上で必ず忘れてはならないものである。評価が単に評価のためのみであるならば、それは無用の行為となるが、真の個性の成長を図る上では、どうしても必要なものである。

×

×

×

要するに、幼稚園にしても、保育所にしても、一人一人の子どもを見つめ、それが、集団の中で、どのように変化していくか、好ましい変化を起こす、変化の方向を好ましい方向へ流していくことを考えることにより、人格形成の基礎を築く大切な幼児教育という期待に答えられるのである。